

# 【研究ノート】楊貴妃と熊野信仰

## ——中世の熊野信仰の正体に関する仮説——

村川 実

はじめに

二〇一年の五月、筆者は、中国の切り絵展に招かれ、

楊貴妃の墓に案内されることがあった。

筆者はそこで、この楊貴妃の墓には遺体は埋まつておらず、楊貴妃は日本に渡り、熊野の山中に隠れたというと話を聞いたのである。

この時いただいた『剪紙図説 武則天 楊貴妃』（孔正一主編、韓籍作）から一部、文章を抜粋する。

「孝謙女皇很同情楊貴妃的遭遇、并設宴招待、給予优厚的待遇。楊貴妃此后被安居在和歌山的熊野、这里是皇家避暑胜地、风景优美、有“蓬莱”之称。」

「孝謙女皇は、楊貴妃に遭つて同情をされ、宴を設

けてもなし、手厚く遇した。その後、楊貴妃は和歌山の熊野で暮らした。そこは、皇家の避暑地であり、風景明媚で、「蓬萊」と呼ばれていた」。

熊野が天皇家の避暑地であったかどうかはともかく、紀伊半島南部が古くから皇家の避暑地であったことは、「日本書紀」にも記されている。孝謙天皇の祖父である文武天皇は牟呂の湯に行幸し、孝謙天皇自身も称徳天皇として重祚した折に、紀伊国に行幸していることが「続日本紀」に見える。

また、熊野が蓬萊と呼ばれてきたことは、徐福伝説と関連して、古来より数多くの研究がある。

こういうことは、中国では広く知られている話であるらしい。例えば三泰都市官報のサイトによれば、陝西师范大學の王双怀教授の話として、次のように紹介されている。

陳鴻に小説『長恨歌傳』を書かせた。そのあとがきに次のようにある。

「質夫舉酒於寒天前曰「夫希代之事、非遇出之才潤色之、則与時消没、不聞于世。」樂天、深於詩、多於情者也。試為歌之。如何。」樂天因為長恨歌。意者、不但感其事、亦欲懲尤物、空亂階、垂於將來者也。歌既成、使鴻伝焉。世所不聞者、予非聞元遺民、不得知。世所知者、有《玄示本紀》在。今但伝《長恨歌》云爾。」

## 訳文

「質夫は白楽天の前に酒を挙げて言った。「そもそも、世間で稀なことというのは、不世出の才子が、これに彩色を施さなければ、結果として時と共に消え去り、世間で聞くことはなくなってしまうのだ。樂天よ、お前は、詩に深い才能を持ち、情も深い。どうか、試しにこれを歌にしてくれないものだろうか?」白楽天は、そこで長恨歌を作った。これは、その事件に感動させるだけではなく、また美人の害を懲らしめ、騒乱を防ぎ、将来の人に教訓を垂れるものとなるだろう。歌ができ上ると、さらにこれを垂

中國において、楊貴妃が熊野に隠れ住んだと言われている背景には、楊貴妃の生存説が深く関係している。

『紅樓夢』研究の大作家として知られる俞平伯氏は、「長恨歌」を研究し、そこに楊貴妃の生存説があることを指摘している。

白居易は、自ら「長恨歌」を書くとともに、友人である

の遺民ではないので知ることはできない。世に知られていることは、「玄宗本紀」にある。(知られていないことは)今は、ただ、「長恨歌」によつて伝えるよりないのである。

元和元年(八〇六)冬十二月、白居易(白樂天)、陳鴻、王質夫の三人は、楊貴妃の亡くなつた馬嵬坂(はかいざか)の近くにある仙遊寺に遊びに行くことがあつた。そこで、話題が玄宗皇帝と楊貴妃の話になり、出た言葉が、先に抜き書きした部分なのである。

すなわち、楊貴妃の物語には、世に知られていない部分があり、それを伝えるために、白居易は「長恨歌」を書いたと表明しているのだ。

「長恨歌」は、言うまでもなく楊貴妃と玄宗皇帝の愛を描いた長編の詩である。しかし、その構成には、極めて不可思議な部分がある。

「長恨歌」の前半部分で、白居易は楊貴妃の死を描いている。ところが、後半部分では、死んだはずの楊貴妃が、仙女として蓬萊(ほうらい)に暮らしており、玄宗皇帝の使いとしてやつて来た方士に、玄宗皇帝との誓いの言葉を伝えるという筋書きなのである。

中国では、この蓬萊を日本のことだとして、楊貴妃が日

描かせ、朝夕、之を覗いていた」。

(注:中国語で肌は肉を現す)

また、「新唐書」の「后妃伝」には、次のようにある。

「密遣中使者具棺槨它葬焉。啓槨、故香囊猶在、中人以献、帝視之、悽感流涕、命工貌妃於別殿、朝夕往、必為鍾歎」。

訳文

「密かに中使者を遣わし(楊貴妃を)葬った所に棺槨(棺)を具えさせた。揃めた所には、ただ、香囊(こうのう)のみがあつただけ

だったので、中人は、是をもつて(帝に)献じた。帝は之を覗て、凄まじく涙を流し、別殿に妃の容貌を描かせ、朝夕そこに行くと、必ずすり泣いた」。

ある人は、「旧唐書」の「肉も皮も、すでに壊れてなく」という記述は、白骨化した遺体が残っていたことを示すものだと言う。果たしてそうだろうか?

まず、地上に放り離しの遺体ならともかく、地中に埋めた遺体、しかも、殯(はむ)に包んだ遺体が、一年半程度で白骨化するものではない。そして、楊貴妃を裸にして埋めたわけ

本に渡つたと言つているのだ。

楊貴妃の生存説が生まれた背景はこれだけではない。

そこから、楊貴妃が熊野に隠れ棲んだと言つてゐるのである。楊貴妃は生まされた背景はこれだけではない。記録では、楊貴妃は縊殺され、紫の褥(よし)に包まれて、馬嵬坂(はかいざか)に慌ただしく埋められた。玄宗上皇はこれを哀しみ、一年半後、楊貴妃の改葬を行つた。しかし、その時、楊貴妃の遺骸は消失していたという。

『旧唐書』の「列伝、后妃伝」には、次のようにある。

「上皇密令中使改葬于他所。初瘞时以紫褥裹之、肌肤已坏、而香囊仍在。内官以献、上皇视之凄惋、乃令图其形于别殿、朝夕视之。」

訳文

「上皇は、密かに中使に命じて(楊貴妃の墓を)他所に改葬させた。初め瘞めた時には、紫の褥(よし)を以て之を裏んだのだが、肉も皮も、すでに壊れてなく、香囊(こうのう)のみがなお残っていた。内官は、(香囊を)以て(玄宗に)献じた。上皇は之を覗て嘆き悲しんだ。乃ち、その形(楊貴妃)を別殿に

でもないだろうに、衣装や裝身具も残っていないのはどうしてだろう? まして、楊貴妃の身体がドロドロに溶けていたのだとすれば、そんなところにあつた香囊(こうのう)を上皇に捧げるとは考えられない。そして何より、楊貴妃の墓は、今でも馬嵬(はかい)の地に小さな塚としてあり、これは何らかの理由で、楊貴妃の改葬ができなかつたことを示している。

すなわち、やはり、楊貴妃の遺骸は消失していたと考えるべきであろう。『旧唐書』の「肉も皮も、すでに壊れてなく」という記述は、楊貴妃の遺骸がなかつた理由を、それ以外に説明ができなかつたからに違ひない。

## 二、日本における楊貴妃の渡来説

楊貴妃が渡つて來たという伝説は日本にもある。とくに、愛知県の熱田神宮に楊貴妃の墓があったことは、鎌倉時代の後期に書かれた天台宗の仏教書である『溪風拾葉集』にある。

『溪風拾葉集 卷六』抜粹

「問。以我国習蓬萊宮方如何。答。唐玄宗帝共楊

貴妃至蓬萊宮。其蓬萊宮者。我国今熱田明神是也。此社壇後有五輪塔婆。五輪銘枳迦種子金字書。此塔婆楊貴妃墓也。然田神義見」

### 訳文

「問い合わせ。我が國を以て蓬萊宮とは如何なる方であるか？ 答え。唐の玄宗帝と楊貴妃は共に蓬萊宮に至つた。この蓬萊宮とは、我が國の今の熱田明神である。この社の壇の後に五輪の塔婆がある。五輪の銘は、金字で枳迦種子と書かれる。この塔婆が楊貴妃の墓であると然田神義に見える」。

また、山口の油谷には、楊貴妃の墓と伝わる五輪塔があり、楊貴妃の菩提を弔うために作られたと伝わる枳迦如來像と阿彌陀如來像がある。

この五輪塔は、形状から見て、鎌倉時代の後期から室町時代の初期にかけてのものと考えられるという。また、枳迦如來像は清涼寺式と呼ばれる様式で、この様式の仏は、鎌倉時代に盛んに作られた。さらに、阿彌陀如來の胎内には、「文永五年八月□日法橋院□」（文永は、鎌倉時代の元寇の頃の年号）の銘があるという<sup>10</sup>。

熱田の伝説も、山口・油谷の伝説も、鎌倉時代にその源流を遡れるのである。

では何故、熱田に楊貴妃の伝説があるのかといえば、熱田が古くから蓬萊と呼ばれていたためらしい。この熱田が蓬萊と呼ばれたことは、尾張守であつた大江匡衡の『江吏部集』（寛弘年間一〇〇四～一〇一二、成立）に初見し、熱田社のことを「蓬萊宮」と呼ぶことがあつたという。

一方、山口・油谷の伝説は、油谷が熊野の古語読みである熊野（ゆや）と発音することからきているらしい。実際、古来からの能の演目にも「熊野（ゆや）」という題の作品がある。

このように、楊貴妃の渡来伝説は、蓬萊、または、熊野と密接な関わりを持つていて、

熊野は徐福の伝説からも、古くから蓬萊と同一視されていたと考えられている。そうであるなら、本家というべき熊野に楊貴妃の渡来伝説がないということは、ますます奇妙と言わざるをえない。



図1 四川省成都市新繁清白郷1号墓出土 画像碑西王母像拓本  
模写 後漢



図2 四川省成都市新都区出土 西王母画像拓本模写

### 三、熊野と西王母信仰

熊野のシンボルが三本足の八咫鳥であることは、言うまでもない。この三本足の鳥が太陽信仰と関係していることも、多くの研究者の指摘するところである。<sup>[12]</sup>

「千字文」という文書がある。これは中国の魏晋南北朝時代の伝説的な能筆家である王羲之（三〇三～三六二）の書を、南北朝時代に活躍した文章家の周興嗣（四七〇？～五二二）が編纂してつくりあげたと伝わり、一千個の重複しない文字で書かれている。中国では古くから、児童の文字の手習い書として使わってきた。日本には、李退<sup>[13]</sup>という六世紀（西暦五〇〇年代）に生存した学者の注釈と共に伝わっている。

その李退の注釈に、次のようにある。

「太陽の中には三本足の鳥がいる。それで太陽を金烏<sup>[14]</sup>と呼ぶ。太陽の色は赤く、扶桑（中国の東方の海中にあるという神木）から登り、咸池（天にある池で、太陽が水浴するという）に入る」。



図4 新宮阿須賀神社の摂社の稻荷神



図5 新宮神倉神社の山頂にあるゴトビキ岩



図3 奥熊野玉置神社の摂社 三柱神社に祀られる三狐神

中国のサイトを調べると、三足鳥は、西王母の使いとされているようだ。百度百科の三足鳥の項目は、「玄中記」「洞冥記」「淮南子・精神篇」など様々な古文書を揚げ、三足鳥と太陽、西王母の関係を明記し、さらに、其他信息（追加情報）として次のようにしている。<sup>10)</sup>

「三足鳥和九尾狐常作为瑞鸟瑞兽列于西王母座旁」。

#### 訳文

「三足鳥と九尾の狐は常に西王母の傍に列する瑞鳥であり瑞獸である」。

実際、中国の漢代の西王母を描いた画像石には、しばしば、傍に三足鳥が描かれている（図1・2）。

三足鳥が西王母の使いとして描かれているのは疑いようがない。

西王母の描かれる傍には、他に、九尾の狐や月に棲むといふ蟾蜍なども描かれている。

振り返って熊野を考えれば、新宮の阿須賀神社や奥熊野の玉置神社には、狐（稀荷）<sup>11)</sup>が祀られ、神倉神社には、蟾蜍（コトビキ岩）<sup>12)</sup>が祀られている（図3・4・5）。西王母

に仕える動物が、熊野にもイメージとして存在しているのである。

西王母に仕える動物が「三足鳥」「狐」「蟾蜍」であり、熊野にも同じ動物がイメージされているのであれば、熊野に西王母が祀られていると考えるのは自然ではないだろうか？

#### 四、楊貴妃と西王母

楊貴妃と同時代に生きた李白や杜甫は、楊貴妃の美しさを西王母に例えている。<sup>13)</sup>白居易は、それをさらに発展させ、「長恨歌」の中で楊貴妃を西王母として描いている。

「長恨歌」には「金闕の西廂、玉扁を叩き転じて小玉をして双成に報ぜしむ」とある。ここにある双成とは、西王母に仕える玉女の輩双成のことである。また、「七月七日、長生殿 夜半人無く私語の時」とは、漢の武帝が七月七日の夜に西王母と交情を持ったという伝説をベースにしていると思われる（これらの伝説は中国の六朝時代に書かれた「漢武内伝」<sup>14)</sup>にある）。「長恨歌」は、楊貴妃の夫である玄宗を、唐の皇帝ではなく、漢の皇帝として描いているが、これは、この「長恨歌」が楊貴妃を西王母に、玄宗を武帝にたとえる

ているためであろう。

一般に「五袞殿の女御」として知られる伝承がある。これは「熊野の本地」とも呼ばれ、熊野比丘尼などによつて盛んに流布された物語である。現在、和歌山県立博物館には、同様の話が「熊野権現垂迹縁起絵巻」として所蔵されている。「熊野の本地」と呼ばれるように、この伝承が、熊野信仰の起源を指し示す話であることは疑いないであろう。

#### 五、「五袞殿の女御」（「熊野の本地」）の伝承

五袞殿の女御を見捨てざるをえなくなり、女御は山中で九十九人の妃たちに命じられた武士たちによつて殺される。しかし、女御は死ぬ前に王子を産み落とし、山の獣たちによつて育てられた王子は、善財王に九十九人の妃の不正を訴え、王は国を捨てることを決意し、王と王子、そして、十一面觀音の利益によつて復活した五袞殿の女御と共に、熊野に渡り、熊野の神となる。

この話は、王子の登場を除けば、楊貴妃の話と似ている。「長恨歌」で「三千の寵愛、一身にあり」と唄われるように、玄宗皇帝もたくさんの妃があつたが、楊貴妃ただ一人に夢中になり、そのため國が乱れ、楊貴妃を殺さざるをえなくなつた。もし、筆者の考えるよう楊貴妃が熊野に祀られているとすれば、これは、「五袞殿の女御」の話と酷似している。さらに筆者は、「五袞殿」という言葉にも注目したい。

能に「楊貴妃」<sup>15)</sup>という題の演目がある。これは、「長恨歌」を題材とした舞台であるが、ここで楊貴妃は、五袞の後に人界に生まれてきた天女とされている。

「五袞殿の女御」とは、不思議な名称であるが、これが、人の妃は嫉妬に狂い、騒ぎを起こし、そのため、王は

くというものではないであろうか。

## 六、三十三間堂棟木の由来の伝承

熊野楊枝川の辺りに「楊枝薬師」という薬師堂がある。ここに三十三間堂の棟木になつたとされる柳の精「お柳」の伝説がある。この伝説は、「祇園女御九重錦」など淨瑠璃や歌舞伎の演目として取り上げられ、江戸時代には広く普及していた物語である。また、三十三間堂では、毎年、一月十四日に「楊枝のお加持」という「楊枝・やなぎ」で、観音さまに祈願した法水を参拝者に注いで、諸病を除くという儀式が行われ、とくに頭痛に効くと伝えられ、これは、平安時代からの伝統をもつといい、三十三間堂最重の法要とされている。「お柳」の伝説を、ただの作り話と片付けでよいものではないであろう。

楊枝薬師の楊の字は、楊貴妃と同じである。また、「祇園女御九重錦」を読むならば、この物語は、連理となつていた桜と柳の枝を白河法皇の前世である蓮華坊が切り離すところから始まっている。連理の枝は、「長恨歌」を連想させるものであり、この「お柳」のお話に楊貴妃のイメージがあるのは明確であろう。

楊貴妃信仰と結びついていると考えられるであろう。今熊野観音寺を崇敬した後白河法皇が、楊貴妃に憧れを抱いていたことは疑いない。後白河法皇は、藤原信西に命じて「長恨歌」の絵巻を作らせていた。『平治物語』上巻には次のようにある。

「信西あまりの勿体なさに、唐の安禄山がおこれる昔を絵にかきて、卷物三巻を作りて、院へまいらせけれども、君はなをげにも思食たる御事もなく、天気他にことなり。」

藤原信西が「長恨歌」の絵巻を作ったことは、九条兼実の日記「玉葉」の中にも見られる。

『玉葉』建久二年（一一九二）十一月五日条

「そもそも長恨歌繪に相ひ具して、一紙の反古有り、抜きて之を見る處、通憲法師の自筆なり、文章褒美べく、義理悉く顯はる、歎歎の餘り、留めんと之を寫す、其の状に云ふ、

唐の玄宗皇帝は近世の賢主なり、然れども其の始め慎みて、其の終り奔つ、泰岱の封禪に有るといえども、

「祇園女御九重錦」では、頭痛に苦しんだ白河法皇が熊野権現から啓示を受けるという話になっている。しかし、実際に三十三間堂が建設されたのは後白河法皇の時代であり、この話の頭痛に苦しんだ法皇のモデルは後白河法皇である。また、楊枝川の「お柳」の伝説では、法皇は、因幡堂に籠もつたことになっているが、この伝説の舞台は、実際には、東山観音寺、現在の今熊野観音寺であり、後白河法皇は、その本尊である十一面観音を崇敬して頭痛から救われたと、これは今熊野観音寺の縁起にある。

今熊野観音寺は、現在、皇室と関わりの深い寺院として知られる泉涌寺の一画にある。

また、この泉涌寺には、玄宗皇帝が楊貴妃を偲んで作らせたと伝わる「楊貴妃観音」があることでも名高い。「楊貴妃観音」は、建長七年（一二五五）に中国に渡った満海によつて持ち帰られたものだと伝えられている。実際には、「楊貴妃観音」は中国で宋の時代に作られたものだとされるが、いずれにせよ、この泉涌寺が、楊貴妃信仰と結びついているのは疑いない。泉涌寺は、鎌倉時代に月輪大師俊芻によつて創られたが、その起源は、平安時代の初期にまで遡るとされ、これが今熊野観音寺であるともされているのである。これを考えるならば、今熊野観音寺もまた、

蜀都の蒙塵を免ぜず、今數家の唐書、及び唐曆、唐紀、楊妃内傳を引きて、其行事を勘み、畫圖に彰はす、伏して望む、後代の聖帝明王、此圖を披きて、政教の得失を憤み、又厭離穢土之志有らば、必ず此繪に見るべし、福貴常ならず、榮樂夢の如し、之をもつて知るべきか、此の圖をもつて、永く寶蓮華院に施入す、時に平治元年十一月十五日、彌陀利生の日なり。」

すなわち、九条兼実は「長恨歌」の絵巻に通憲法師（藤原信西）の書付があるのを見つけて、その内容に感動し、記録として残したのである。しかし筆者が注目するのは、この「長恨歌」絵巻が寶蓮華院、すなわち三十三間堂に収められていたとする記述である。楊枝川の伝説の「お柳」は、三十三間堂の棟木となつたとされ、三十三間堂では今も、「楊枝のお加持」という儀式が続いていることは、先に述べた。

「お柳」の伝説が後白河法皇の熊野信仰と関係し、同時に、後白河法皇が楊貴妃の絵巻を三十三間堂に収めていたという事実と関連していることに疑いはない。これにおいて、後白河法皇の熊野信仰が、同時に、楊貴妃信仰であつたことが裏付けられる。

## 七、亭子院の作った「長恨歌」屏風の記録

平安時代に楊貴妃の絵を作ったのは、後白河法皇が初めてではない。先に『源氏物語』が「長恨歌」の影響を受けていることを述べたが、『源氏物語 桐壇の巻』に次のようにある。

「このごろ、明け暮れ御覽する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ」

すなわち、作者である紫式部は、この時代に存在した亭子院の描かせた「長恨歌」の屏風をモチーフに、『源氏物語』の「桐壇の巻」を書いているのである。この「長恨歌」の屏風が存在したことは、伊勢の詩『伊勢集』にも確認できる。<sup>(2)</sup>

亭子院が宇多法皇の別名であり、この宇多法皇が熊野に参詣した最初の皇族であることは、今更、説明をするまでもないであろう。

## 結び

指摘したように、熊野信仰は楊貴妃信仰と結びついており、それは少なくとも、宇多法皇が熊野に参詣した延喜七年（九〇七）にまで遡れる。

これは今も、楊貴妃の伝説が伝わっている熱田や山口の記録とは、比べものにならないほど古いものだ。では、なぜ現在の熊野には、この楊貴妃信仰が伝わっていないの

か？

筆者はこれを、当時の人々が、本当に熊野に楊貴妃が渡米したと信じていたためだと考える。「白村江の戦い」で敗れて以来、日本の朝廷は、唐の国を怖れ、遣唐使として使節を派遣してきた。

楊貴妃は、玄宗皇帝から死刑命令を受けた身であり、言わば、国際犯罪人と言うべき存在である。日本の朝廷には、楊貴妃に同情をする余地はあったが、もし、生存し渡来していたとすれば、決して、その存在を公表することはできなかつたであろう。

そして同時に、楊貴妃が傾国の美女として、かつ、西王母と同一視されたとすれば、その力を朝廷は崇敬すると同時に怖れたであろう。

このため、熊野の楊貴妃信仰は秘密にされ、念入りに隠されたものと筆者は考える。

熊野の楊貴妃信仰は、先に述べているように、延喜七年（九〇七）の宇多法皇の熊野参詣の時には、すでに成立していた。

では、この熊野の楊貴妃信仰は、何時、誰によつて創られたのであらうか？

熊野の楊貴妃信仰が、楊貴妃の史上の死である七五六年ある。

宇多法皇が熊野に参詣したのは延喜七年（九〇七）、まさに、この年の春、中国では大唐帝国が終焉を迎えていたのである。宇多法皇は、まだ天皇であつた時代、菅原道真（すがはらのみちまさ）を厚遇したことでも知られている。菅原道真が遣唐使の廃止を提言し、同時に「長恨歌」を作った白居易に強い関心を寄せていたことは、様々な研究者の指摘するところだ。

宇多法皇の時代、「長恨歌」と「楊貴妃」のことが広く知られ、唐の國の情勢に日本の朝廷が強い関心を抱いていたことは疑いない。その中で、「長恨歌」の屏風が作られ、最初の皇族による熊野参詣が行われたのである。この宇多法皇の熊野参詣が、唐の國の終焉と楊貴妃への信仰によるものだったと考えるのは穿ち過ぎであろうか？

以降に成立したことは疑いない。

しかし、楊貴妃が本当に渡来していたとしても、それは、生身の楊貴妃であり、信仰の対象ではなかつたはずだ。楊貴妃が神格化されるのは、八〇六年に白居易が「長恨歌」を発表した以降であろう。

熊野の楊貴妃信仰は、八〇六年から九〇七年までの約百年間のどこかで成立した。

空海、最澄、円仁、円珍といった密教の指導者たちがキラ星のごとく現れ、海を渡り、日本の神々を仏教の仏に結びつけ神仏が習合されていった時代である。この時、楊貴妃も、イザナミ、スサノオといった熊野の神々に結びつけられ信仰の対象とされていった。

筆者はそう考えるのである。

## 【補足】

本論考は、筆者が蓑虫のベンネームで出版している「龍神楊貴妃伝1 楊貴妃渡来は流言じやすまない」(<http://www.amazon.co.jp/dp/4990960408/>)、および、「龍神楊貴妃伝2 これこそまさに楊貴妃後伝」(<https://www.amazon.co.jp/dp/4990960416/>)の一部を抜粋し、再編したものである。

本考察は、從來の熊野研究では誰も行つたことのない提言である。賢明なる諸姉・諸兄の本論説への検討・検証、批評・批判をお願いしたい。

## 注

- (1) 孔正一（西安小雁塔博物館館長）主編、韓 靖（西安剪紙会会长）作「剪紙圖說 武則天 楊貴妃」中国、三秦出版社、一六九頁。
- (2) 「日本書紀」齊明天皇三年（六五七）九月条、同四年（六五八）十月条。
- (3) 「続日本紀」大宝元年（七〇一）十月八日条。
- (4) 「続日本紀」天平神護元年（七六五）十月十三日条。
- (5) 奥野利雄「ロマンの人・徐福」参考。
- (6) 三泰都市官報。王双怀教授暢談楊貴妃的若干問題（<http://cul.sandin.com/2015/0625/121518.shtml>）。
- (7) 藤井良雄 陳猶「愈平伯」「長恨歌」と「長恨歌傳」とが伝える疑義」訳注 福岡教育大学紀要第五十二号。
- (8) 渡瀬淳子「熱田の楊貴妃伝説—曾我物語卷二「玄宗皇帝の事」を端緒として—」日本文学／日本文学協会編、五十四（十二）二〇〇五・一二、二（二九頁）。
- (9) 加藤蕙「楊貴妃漂着伝説の謎」自由国民社、一三一（一三二頁）。
- (10) 伊東宏「秦、徐福伝承の研究（後編）」、「人間と環境－人間環境学研究所研究報告」二（一九九八）ISSN 1343

地 「歎きの中乃、歎きとかや」

「我もそのかみは、上界の諸仙たるが、往昔の因みありて、仮に人界に生まれ来て、楊家の深窓に養はれ、未だ知る人なかりしに、君聞し召されつ、急ぎ召し出し後宮に定め置き給ひ、偕老同穴の語らひも縁書きぬれば徒に。又この島にただ一人、帰り来りてすむ水乃、あはれはかなき身の露乃、邂逅に逢ひ見たり。静かに語れ要き昔」。

(19) 今熊野觀音寺に掲示の縁起抜粋。

- (20) 「伊勢集」和歌五十二（六十一）。
- (21) 「扶桑略記」延喜七年（九〇七）十月二日（二十八日条）。
- (22) 潘怡良「菅原道真における白詩の比較表現の受容」（岡山大学大学院社会文化科学研究紀要第三〇号）他参照。

4780

- (11) 加藤蕙「楊貴妃漂着伝説の謎」自由国民社、一六四（一六五頁）。
- (12) 萩原法子「熊野の太陽信仰と三本足の鳥」戎光祥出版。
- (13) 小川環樹・本田章義注解「千字文」岩波文庫、三二頁。
- (14) 百度百科三足鳥（神话中的神鸟）<https://baike.baidu.com/item/三足鸟/1247367>
- (15) 奥熊野玉置神社や新宮阿須賀神社の狐（稻荷）伝承は、古い起源を持つと推測される。玉置神社の古文書である「玉置山權現縁起」には、「三狐神」所謂 天狐 地狐 人狐ナリ。新宮ニ於テハ飛鳥ニ住ム。則チ漢司符將軍ノ妻室ナリ。三天明神ノ母ナリ。權現ノ氏人 千与定ノ子」とある。
- (16) 「清平調詞」の第一首で、李白は、楊貴妃のような美しい女性には、西王母の棲むとされる群玉山や瑶台でしか会えないとする。また、杜甫は、「奉同郭給事湯東靈湫作 其二」で安禄山を月に棲む蟾蜍に、玄宗を天尊に、楊貴妃を西王母に例えている。
- (17) 「漢武帝内伝」とも言う。中国、六朝時代の志怪小説。武帝の行状のうち、神仙との交渉をおもに述べたもの。参考「国訳漢武内伝」国立国会デジタル図書館 国訳漢文大成第十二卷 <http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/1913008>
- (18) 能 「楊貴妃」抜粋。  
地 「まづ天上の五袴より、須弥の四州北乃アマまさまでに、北洲の千年つひに朽ちぬ」  
シテ「いはんや老少、不定の境」